① 事業名

「中之島に鼬を放つⅢ――大学博物館と共創するアート人材育成プログラム」

〈プログラムのテーマ〉

コロナ禍を経て世界が再び動き出した。こういう時代に芸術に何ができるのか？　神出鬼没な「鼬」は、この時代のアートを喩えるのにまたとない生き物である。現代のアートとはまるで都市（大阪中之島）の鼬といえる。アートである鼬が街中に放たれる。アートに携わる私たちも鼬となり放たれる。このプロジェクトは、都市とアートと人間の「イタチごっこ」を仕掛けようとするものである。

大阪大学中之島芸術センターを軸に、鼬となる受講生、アーティスト、アート、事業担当者それぞれの交流を通してプログラムを展開する。

② 人材育成目標（目指す人材像・人材が必要な背景・育成対象者）

目指す人材像

1）美術、音楽、演劇など、多様な芸術ジャンルに精通し、展覧会や上演など総合的にアートの実践能力をもつ人材
2）アーティストとの交渉能力を備え、地域社会とのファシリテーション力を持ち、アート創造のプロセスに関わり、社会に還元する能力を持つ人材
3）アーティスト、アートディレクター等とアートの受容者とが交流をし、今日のアートの意義を多面的に発信・研究できる人材

人材が必要な背景

大阪大学では芸術系研究教育の拠点として、大阪大学の発祥の地に「大阪大学中之島芸術センター」を創設した。大阪の中之島エリアは、美術館やコンサートホール、科学館、国際会議場などの文化施設や歴史的建造物、企業の高層ビル群、公園や水辺の自然が共存している。「水都大阪」を象徴する土地で、常に文化・芸術が創造される可能性を持っている。大阪大学中之島芸術センターでは、アートの教育研究を推進し、学術と芸術の発信起点となり、社会との共創を目指している。そのため、学術と芸術の両者を学んだアートの実践者の教育は喫緊の課題となっている。対象は、学生だけでなく広く社会人などとも協働し、性別や年齢、社会的地位にとらわれないアートマネジメント人材を育成する必要がある。

育成対象者

受講生：44 名（男性 13 名、女性 31 名）／**属性：**公務員：2 名、財団・NPO 等職員 3 名（劇場等芸術関係 3 名）、小中高大教員 2 名（芸術関係 1 名）、学校職員 4 名、会社員 12 名、学生・大学院生 4 名、個人事務所経営 4 名（芸術関係 2 名）、フリーランス（芸術関係）12 名、アルバイト他 2 名／**職種：**芸術系技能職 11 名、その他技能職 3 名、教員職 2 名、総合職 11 名、事務職 10 名、研究職 1 名、学生・大学院生 4 名、無職 2 名／**年代：**10 歳代 2 名、20 歳代 5 名、30 歳代 5 名、40 歳代 10 名、50 歳代 7 名、60 歳代 14 名、70 歳代 1 名

③ 令和６年度育成プログラムの内容（予算額・取組内容等）

予算額

25650 千円

取組内容等

大阪大学中之島芸術センター、大阪大学大学院人文学研究科、大阪大学総合学術博物館の教員が中心となり、地域の芸術諸機関*と連携して実施する。大学を舞台に、アートやアーティストと大学の研究、一般社会をつなぐリサーチ型アート・プログラムを実施し、大学発信型のアート・プロジェクトを生み出す。また大学、社会人のアートを通した「アート・ネットワーク」と呼ぶ新しい社会構造を創り出すことで、アートや大学研究の持つ意義を社会へ再度提示する。

*連携機関：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、淨るりシアター、公益財団法人吹田市文化振興事業団（メイシアター）、豊中市都市活力部魅力文化創造課、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、公益財団法人箕面市メイプル文化財団

プログラムを統括セッションとリサーチ・フレームに大きく２分する。統括セッションでは、オープニング・セミナー、サマー・スクール、クロージング・シンポジウムを実施している。また最終年度となる本年度では、受講生をジュニアとシニアに分け、シニア受講生が中心となってアーカイヴ・プログラムを担当し３年間を総括する。リサーチ・フレームでは、「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティーク」の４つを設定し、受講生はそれぞれのリサーチ・フレームを専属で受講している。同時に、別のリサーチ・フレームも一部受講可能とし、リサーチ・フレームを横断できるように設定する。各フレームの中には、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエーション等のステップを組み込み、基礎から応用、成果公表まで配置してアート・プログラムを推進する。

④ 育成成果報告（過年度成果含む）

本プログラムでは、芸術諸機関等に勤務する人、勤務を希望する人を受講生に採用している。過去２年間で、のべ 76 名の受講生を採択、47 名の修了を認定した。修了した受講生の中には、学習成果を元に、成果を発揮している。例えば、劇場や施設におけるアクセシビリティや文化芸術の可能性について勤務先で議論を深めた方、アーティストと共同し調査を継続させて作品の発表を行なった方、本プログラムでは講師としてプログラムに参画した方、近隣地域のアートコーディネータープログラムを受講・修了し、自身で企画を立案・実施している方などがいる。

⑤ 今後の実施予定（将来展望）

大阪大学には芸術学専攻があり、美学・文芸学、日本東洋美術史・西洋美術史、音楽学・演劇学、アート・メディア論といった、様々な芸術に関する研究と教育の蓄積がある。新設の大阪大学中之島芸術センターには、教室のほかに展示室やスタジオが設けられており、展覧会や上演芸術について実践的に学習、教育を行うことができる。上記のように、研究の蓄積の上にアートの実践を学ぶ設備が整ったため、芸術学の蓄積による人文学的視点を用いた教育の座学と、準備から公演・展覧会に至る実践的な学習の両者を提供できる。現在、「アート・ファシリテーション」という高度副プログラムを実施しており、さらに充実したアートの学習のためのカリキュラム等を設定する予定である。育成された人材とアーティストが共同して、様々なアートイベントを開催して、大阪の新たなアート発信の地としていく予定である。